

三位一体後第五主日礼拝 「イエス・キリストとの出会い」

ルカ福音書 5:27～32

ルカ

5:27 その後、イエスは出て行って、レビという徴税人が収税所に座っているのを見て、「わたしに従いなさい」と言われた。28 彼は何もかも捨てて立ち上がり、イエスに従った。29 そして、自分の家でイエスのために盛大な宴会を催した。そこには徴税人やほかの人々が大勢いて、一緒に席についていた。30 ファリサイ派の人々やその派の律法学者たちはつぶやいて、イエスの弟子たちに言った。

「なぜ、あなたたちは、徴税人や罪人などと一緒に飲んだり食べたりするのか。」31 イエスはお答えになった。「医者が必要とするのは、健康な人ではなく病人である。32 わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである。」

1 主イエスとの出会い

今日の聖書箇所には、イエス・キリストと徴税人レビとの出会いが描かれています。ご一緒にこの出会いに心を向けて聖書に聴いてまいりましょう。

2 出ていく

「その後、イエスは出て行って」と、ルカは語り始めます。どこから出て行ったのでしょうか。直前の聖書箇所によりますと、主イエスは、屋根を破って床ごと吊り下げられた中風の男に「人よ、あなたの罪は赦された」(20 節)「起き上がり、床を担いで家に帰りなさい」(24 節)と仰り、罪を赦して中風の病を癒されました。寝たきりだった男は立ち上がり、喜びに満たされて、神を賛美しながら、床を担いで家に帰っていきました。すると、「人々は、皆、大変驚き、神を賛美し始めた。そして、恐れに打たれて、『今日、驚くべきことを見た』と言った。」(26 節)と聖書にあります。この 26 節の『驚くべきこと』と訳されている原語のギリシャ語は“パラドクサ”という単語で、英語の“パラドックス”の語源となった言葉です。“パラドックス”という英語には“逆説”という意味があります。起こる筈のない事が起こった、考えられない事が起こった、まさに目の前で起こった神の業への恐れ、戦きがこの家の中に満ちていました。人間の言葉が決定的に空しくなることが起こった。その畏れに打たれている人々をあとに、主イエスは、その場所から出ていくのです。

ルカの福音書を読んでいると、主イエスはいつもどこかに向かっておられます。まるでずっと旅をしておられるかのようです。今日も主イエスは徴税人レビを求め、彼と出会う為に歩みだされました。

3 徴税人

徴税人とは税金を取り立てる人のこと。主イエスの時代のイスラエルは、ローマ帝国の支配下にあり、住民たちには様々な税金が課されました。人頭税、通行税、物品税など。ローマだけではなく。ローマの傀儡であるガリヤ領主ヘロデ・アンティパスも税金を課します。ローマとヘロデ、住民は二重に税を納めなければならない、たまったものではありません。そのローマ帝国やヘロデから税金の徴収仕事を請け負っていたのが、徴税人。彼らは、決められた税額に自分達の取り分を大幅に上乗せして取り立てていました。当然、人々から嫌われ、憎まれるようになります。それだけではなく。当時のユダヤ人社会では、異教の神々を信じる異邦人は汚れており、付き合いはいけない…という律法がありましたが、徴税人たちは、仕事の性質上、ローマ人と付き合う事になりますので、宗教的にも汚れた者として嫌われ、会堂で行われる礼拝からも締め出されていたのです。徴税人は、人との交わりからも、神との交わりからも追い出されていました。

4 主イエスの眼差し

町の嫌われ者、つまはじき者、まともに付き合ってもらえない徴税人レビ。主イエスは彼が収税所に座っているのを見た…とあります。27節です。「その後、イエスは出て行って、レビという徴税人が収税所に座っているのを見て」ここで『見る』と訳されているギリシャ語には、『ちらっと見る』とか『見かける』というような意味はありません。まるで素晴らしい劇を見るように、集中して没頭して見いる、よく観察して吟味して理解する…という意味のある言葉なのです。主は、レビの方に身を乗り出すようにして心を傾け、目を凝らしておられます。

レビは、そんな事とはつゆ知らない。いつもの生活、いつもの金もうけ。自分の人生ではもう大した変化は起こらないに違いない。日常生活の中で、「人生こんなものだろう」という諦めの中に座り込んでいるのは、現代も古代も変わらない私達の姿ではないでしょうか。

しかし、主は既にレビを、見つめていてくださいます。そして近づき声をおかけになります。「私に従いなさい」(27 節)。レビは驚いて、声の主であるイエス様のお顔をまざまざと見つめた事でしょう。その時、イエス様の瞳に、レビの姿が映っていた…そんな場面を想像する事は許されると思います。

5 自分が分からない

主イエスの瞳に映っていた自分の姿を見つけたレビは、どういう気持ちであったろうか…と思いを巡らせていた時、ある祈りと出会いました。ルドルフ・ボーレンというドイツの神学者が書いた「祈り」という本にあったものです。ボーレン先生が第一テモテへの手紙を説き明かしたカルヴァンの説教に触発されて、

祈りの修練の為に書いた本。思ってもみないような新しい言葉でボーレン先生は力強く祈っています。その祈りの中にこういうものがありました。

「永遠の御神よ、我らがこの書…聖書の事です。我らがこの書を開くとき、我らが死なねばならぬことを、思わせてください。

我らが高ぶってはならぬことを。

恵みを受ける際に、我らの心を低くしてください」

この礼拝堂で声に出して祈って、私は“はっ”としました。「私は死なねばならぬ身である」という事をすっかり忘れて生活している自分に気づかされたのです。そして、主イエスの瞳に映し出された自分を見たような気がしたのです。主の瞳の中に映し出された自分の姿、あたかも永遠に生きる者の如く考え、ふるまい、生きている傲慢な自分。その姿が主イエスの瞳には映っている。にも拘わらず、イエス様は、罪ある自分をその眼差しの中に受け入れ、愛してくださっているのだ…と。

目は口ほどにものを言う…と言います。その人の眼差しは、その人の本質を表すもの。主イエスの眼差しは、私達一人一人の罪の為に十字架に命を投げ出してくださった方の眼差しです。どんなにその瞳に映し出された私達の姿が醜かろうとも、情けなかろうとも、その罪のままに私達をとことん愛しぬく人の眼差しです。その中にあっては、自分の持っているものなど何者でもない事がわかるようなまなざし。私達がこの主イエスの眼差しの中にいる事に気づかされた時、さきほど共に賛美した「永遠の光」が私達の内に差し込んでくるように思います。

6 主は声をかけられる

主イエスは私達の勘違い、混乱、私達の不自由さ、すべてご自分の事の様に悲しみ、嘆き、痛んでくださる…主イエスがレビにかけた言葉「わたしに従いなさい」(27 節)の中にも、その憐みは、愛は響いていました。

実はこの部分のギリシャ語は継続を表す命令形です。厳密に訳せば、「わたしに従い続けなさい」。イエス様は、罪に囚われたレビを愛しみ、ご自分の弟子として生きよ…と声をかけられたのです。

7 全てを捨てる

この主の呼びかけを聴いたレビは、「**全てを捨てて立ち上がり、イエスに従った**」とあります。“全てを捨てて”という表現は、持っているもの、仕事や財産、家族までも一切合切を捨ててイエスに従った…と急進的な献身を思い起こさせます。しかし、ルカは、持ち物や家族を全部捨てた…という表面に現れた行動を強調したかったのではなくて、レビは自分の最も本質的なものを棄て

去った…という事を言いたかったのだと思うのです。レビが捨てたのは、今までの自分です。主イエスの瞳に映る自分を見、その眼差しのうちにイエス・キリストと出会い、今までの自分の生き方がなんの意味もなく思えた、本当に生きていたようには思えなくなったのです。

神を知る事なく生きていると、人は自分が第一とするものに支配されてしまうように思えます。神を知らずにお金を第一として生きる人は、お金に支配されている。神を知らずに欲望を第一として生きる人は、欲望に支配されている。神を知らずに人との関係を第一として生きる人は、人間関係に支配されている。時と状況に応じて主人とするものは様々に変わるでしょうけれど、結局、不完全な人間である自分を主人とした命、窮屈な命を生きている事に変わりはないでしょう。

しかしレビは、今やキリスト・イエスと出会いました。そして、自分の本来の在り方に気づかされた…と言ってもいいのだと思います。レビが主イエスの事を何か知っていたか？というところではなかった筈です。ただ彼には分かった。いや、知らされた。この人は自分の事を自分以上によく知っており、私を愛し導いてくれる方だ…と。このお方以上に信頼できる人はいない。イエス・キリストに従う事こそ、自分の本来の命なのだ…とレビは気づかされたのです。そんなレビの変化をルカは、「すべてを捨てて」と表現しました。

レビは立ち上がりました。レビはこの時新しく生まれ変わった…と言ってもいいと思います。それは、28 節の「彼は何もかも捨てて立ち上がり」の「立ち上がる」という単語にはイエス様が十字架の死から甦られた時に使われている単語である事からも分かります。この「立ち上がる」という単語には、「復活する」という意味もあるのです。「彼は何もかも捨てて、新しく復活し」とも訳せるからです。

8 盛大な宴

新しく生まれ変わったレビは、自分の主(あるじ)となったイエスの為に、自分の家を解放して盛大なパーティを催しました。レビは、このパーティをなんの為に開催したのでしょうか。主イエスをもてなす為であったでしょう。しかし、目的がそれだけなら、主と彼の弟子たちと自分だけでよかったはず。わざわざ徴税人や大勢の人々を招く必要はなかった。何故彼らまで呼んだのでしょうか。

自分のかつての仲間たちに、イエス様を紹介する為だったのだろうか…と説教した牧師がいます。私もまさにそうであったろうと思うのです。レビは、お金に支配された自分を解き放ち自由にしてくださったイエスというお方をみんなに紹介したかった。そしてイエス様と出会えた喜びを分かち合いたかったのです。今までの生き方を棄て去り新しくされたレビ。彼は、他の人の為に心を砕く者となっていました。

9 律法学者とファリサイ派

しかし、ファリサイ派の人々と律法学者たちが主イエスと弟子たちの行動を批判します。ファリサイ派や律法学者と主イエスの議論は今日は概要だけにとどめて、来週、詳しく見て行こうと思います。

それはともかく、彼らはモーセの律法を守るのにとっても熱心でした。ですから、律法を守れない人々や徴税人と同じ食卓につく、仲間としての交際をする主イエスを理解できなかったのでしょう。彼らの律法によればそれは考えられない事でありました。

ですが、彼らは気付いていなかったのです。彼らは最も大切な事、律法が目指す目的を忘れていた事に気づく事はありませんでした。律法は手段にすぎない。しかし彼らにとっては、手段が目的となっていました。彼らのような生き方を神は嘆いておられました。それは「**わたしが喜ぶのは、愛であっていけにえではなく、神を知ることであって、焼き尽くす捧げものではない**」(ホセア 6:6) 主イエスの時代よりも700年以上前、預言者ホセアを通じて語られた神の嘆きとその事を物語っています。神の愛に共に与る為に律法があったのですが、彼らは律法を守る事が目的となり、律法に支配されて生きていました。そして神の愛から人々を締め出す罪を気づかずに犯していたのです。

もし彼らがきちんと主イエスを見つめていたら、そんな自分達の逆転した姿が見えていたでしょう。しかし、彼らは主イエスを見つめる事はありませんでした。主イエスの眼差しの中に入る事を拒み、眩いていたのです。イエス様は悲しんでおられたのではないかと思います。

10 悔い改め

イエス様は、まさにファリサイ派達が忘れていた神の目的を為す為にこの世に来られたからです。それをファリサイ派達に気づいて欲しかったのだと思います。だから次のように言われた。31節、32節「**医者が必要とするのは、健康な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めに導くためである。**」

ですが、この主イエスの言葉は律法学者やファリサイ派だけに向けられたものでもありません。私達にも向けられた言葉です。主は、私達に問いかけているのです。「あなたは、正しい人か、罪人なのか。あなたは私を必要としない人間なのか、それとも必要としているのか？」と。主イエスとの出会いは、私達に決断を迫るものであるのです。

イエス様の眼差しの内に私達は答えます。「私どもは、あなたを必要とする罪人です。どうか私どもの罪を清めてください」と。そう答えて私達は洗礼を受

けます。洗礼を受けて、私達は自分を捨てるのです。そこには大きな喜びがあります。

11 「人となった」喜び

イエスと出会い従って行く事を決断した喜びを考えていて、ある牧師が説教の中で紹介していた言葉を思い出しました。それは高齢で洗礼を受けた一人の女性の言葉です。その女性はとある地方の山奥に住んでいました。教会員の家族でしたが、既に寝たきりで視力もどんどん落ちていたそうです。教会の礼拝に出席する事はできません。牧師は月に一、二度訪問して聖書を取り次いだそうです。明治24年生まれの彼女は教育も満足には受けておられなかったそうですが、牧師の語るイエス様の物語に目を輝かせて喜んで耳を傾けておられたそうです。「ほお、湖の上を渡りなされたかね」「ほう、復活されたかね」と嬉しそうに仰って、はるか遠くを見つめる顔されていたそうです。

やがて、信仰が与えられ、洗礼を受ける事となりました。日曜日の礼拝の後、牧師と教会員が自宅に出向いての洗礼式でした。その翌日、牧師が訪ねて、「昨日はどうでしたか」と聞いた時、彼女はにこにこ笑いながら、「なんか、ようやく人間になれたような気がした」と言ったそうなのです。

「なんか、ようやく人間になれたような気がした」イエス・キリストと出会い、従いゆく事を決心して、私はやっと人間になった。この話を読んだ時、私は自分がイエス・キリストと出会った時の事を思い出しました。確かにそうでした。本当にそうでした。私もキリスト・イエスを知って生きる事を知った、それまでは生きていたつもりだったけど、本当は生きていなかった。確かなものなど何もなく、儚いものに望をおいてあがきながら過ごしていただけだった。でもキリスト・イエスと出会った。いや、キリスト・イエスが出会ってくださった。その眼差しで抱きしめてくれた。私はこの上もない確かさで愛され、生かされている、私の命には意味があるんだ…と知らされて、人として生きる深い喜び、私の存在を支える喜びを知った、命を知った…と。「やっと人間になれたような気がした」の言葉にはそんな語り尽くせぬ深い喜びに満ちています。

同じことを、先ほどの「祈り」という本の中でボーレン先生はこう言っています。「“幸いなる”私“の死、”我ら“というキリストの体の内に甦る」。自分を主人として生きる儚い命、自分勝手に生きる命に死に、キリスト・イエスに連なる命として甦る。キリストの内に甦る…これこそ、人となる…という事ではないでしょうか。そして、私が死んでキリストの内に甦る事こそ、イエス・キリストが私ども罪人を招いている悔い改めの実ではないでしょうか。

12 聖餐

そうして、私達は主の食卓に与る者とされるのです。弟子たちもレビの家で開かれた主イエスを中心とした食卓についてのように、私どもも主を中心とした喜びの食卓を慕い、そこに与りたい願う者達。その食卓に連なるために、私達は、父なる神の御前にそれぞれの罪を悔い改め、イエス様に清めて頂きます。横浜ナザレン教会では、来月の第二週の礼拝で聖餐の恵みに与ります。聖餐までの一か月、イエス様と出会い、悔い改めの恵みを受け、喜びの食卓につくレビに思いをはせて生活していきたいと思います

13 主の招き

ここまでルカ福音書5章の癒しと招きの物語を見てきました。主は、仕事の失敗に打ちひしがれるシモン・ペトロとその仲間、重い皮膚病にかかり社会から疎外された男、中風で身動きできない男と出会い、病を癒し、ご自身のもとへと招いてきました。

主イエス・キリストとの出会いは本当に不思議です。私達はその時を知りません。最もよい時に最もよい状況の中で、主は私達それぞれと出会ってください。しかし、どうやらルカ福音書5章のいくつかの出会いを見ても、私達が病や挫折など苦しみの中にいる時にこそ、主イエスが出会ってくださる事が多いように思えます。私達が順調な時よりも逆境にいる時の方がイエス様の声がよく聞こえるのかもしれませんが、しかし、どんな困難の中にあっても、キリストとの出会いが、全てを変えます。その事を語っている内村鑑三の言葉を紹介したいと思います。

「善事とは神を信じることである、悪事とは神から離れて人と自己とに頼ることである。そのほかに善事もなければ悪事もない。病気は必ずしも悪事ではない。もし私達を善なる神に導くならば病気もまた善事である。健康は必ずしも善事ではない。もし健康が人に自己を頼らせ、自己を賢いとおもわせるようになるならば、健康はかえって悪事である。貧困も同じことである。その反対の富貴も同じことだ。」内村鑑三は愛娘を病で失うという深い悲しみを知っている人です。病気の辛さを誰よりもよく分っている内村が、「病を通じてキリストを知る事ができるのであれば、それは善い事なのだ」と断言しています。慰め深い事です。キリストとの出会いは、病いをも善事となす…死を超える命を見据えた言葉でしょう。

主イエスとの出会いは、一回限りのものではありません。人生の困難、試練を通して常に新しくキリストは我々と出会ってくださいます。そしてより深くご自身を示してくださるのです。今日もイエス様は、この礼拝の中へと出て来てくださり、私ども一人一人をその眼差しの中に包んでくださっています。なんと幸いな事でしょうか。このお方が喜んでくださる一人一人でありたい、横浜ナザレン教会でありたい…と切に願います。